

日本山岳会 越後支部報

第 30 号

令和3年2月15日

発行 公益社団法人日本山岳会越後支部

発行者 桐生 恒治

新潟県見附市学校町1-9-19

TEL・FAX 0258-62-0148

広報委員長 佐久間 雅義

私の一枚

霧氷の山頂より中ノ岳を望む

数年前、岳友が駒の小屋（越後駒ヶ岳）の管理人をしていた時、小屋仕舞いの手伝に同行しました。

作業もすっかり終わりそのまま一泊し、翌朝起きてみると、夜半気温が下がり、あたり一面雪化粧で朝の陽光に輝いていました。急いで山頂に駆け上がり、写した1枚です。

撮影者 井口 光利



支部活動重点施策について

支部長 桐生 恒治

新型コロナウイルスの終息どころか益々増長する気配であります。さらに年末年始には数年に一度と言われる寒気流入で大雪に見舞われました。今年はどうなるのかと不安な世相を感じていますが、ベストを尽くして命運を切り開く気持ちで臨みたいと思っています。

昨年四月早々の全国非常事態宣言による自粛要請で、支部行事の殆どを中止・延期の措置を取りました。支部総会書面議決や支部年次晩餐会中止、事業委員会や集委員会会の山行計画中止、自然保護委員会の子ども登山教室延期、主要行事で支部会員が顔を会わせ情報交換する機会がありませんでした。新設したユース委員会も名簿作りのみで活動できず、県山協委員会も手持無沙汰でした。しかし、広報委員会は計画通りに工夫を凝らし支部報を発行し、事務局は三役・委員長会議や役員会を予定通り開催し、支部活動の内容も臨機応変に対応してくれました。その一例で、第63回高頭祭はコロナ感染防止対策して縮小開催で伝統行事を継続し、更に遠藤顧問の発案で「写真でみる高頭祭のあゆみ」を編集発刊する運びとなりました。支部山行も11月1日に番屋山（933m）を日帰り「現地集合・現地解散方式」で実施し、久しぶりに多くの会員が参加しました。この山行形態は、今後のコロナ共存を念頭にした行事として

実施できる目途が立ち、方向性を示してくれました。現在スノートレッキング同好会主催で、12月4月まで月1回のペースで雪上散歩を楽しんでいます。

今後の支部活動重点施策について紹介し、支部会員皆様のご理解とご協力を得たいと思います。①弥彦山大平園地の高頭仁兵衛翁寿像碑を、後世への継承遺産とするため修復工事を実施しリニューアルします。そのための修復募金を開始しており、5月6月頃に着工して7月25日（日）高頭祭で竣工式を行う予定です。②越後・山岳古道調査は、後藤副支部長が詳細計画を別項説明のため割愛しますが、全員参加できる興味ある内容になると思います。③支部山行の平日トレッキングや公募登山は、2020年度計画をスライド移行する予定ですが、山岳古道調査ともコラボしたいと考えています。④越後ユース委員会の活動は、普段仕事で忙しい60歳以下のメンバーを如何にして支部行事に参加してもらうかであり、特別な行事を計画しているわけでありません。支部活動の一環として本部や他支部ユースとの情報交換もしながら連帯感を構築できるように努めたいと思っています。

コロナ禍での果ごもり生活がもう少し続きそうですが、これを機に日本山岳会越後支部の仲間同士で身近で気軽な里山に登り、故郷の山を再発見してみたいと思います。

峠シリーズ

県境の山廻りの道・

坂田峠

鶴本修一

2万5千分1地形図「親不知」(平成27年・国土地理院発行)に坂田峠(標高約600m)が記されています。その峠の南北に1本の登山道を確認。アルプスと海をつなぐ梅海新道です。本年6月4日には全線が開通して50年の節目を迎えます。昨年はコロナ禍の影響を受けたこともあり、梅海新道を往く登山者の多くが日帰り、白鳥山を楽しむ人たちが混雑した1年となりました。車がこの坂田峠まで入ることができないので、すべて土日、祝日に関係なく、平日でも天気の良い日の駐車場はほぼ満車状態でした。登山者はこの坂田峠から梅海新道に入ることができます。今は賑やかな坂田峠周辺ですが、梅海新道が開通する以前は、藪でおおわれていて誰も訪れることなく、栄え賑やかだった頃を語り伝える人もいなかったという状況でした。そんな中、1971年6月に梅海新道が全線開通し、その後にここまで林道が通り、登山者がこの地を利用するようになってから、年々この坂田峠周辺の歴史がよみがえり、多くの人に伝えられるようになったという経緯があります。

【陸街道の難所、親不知・子不知】

親不知(市振↗親不知駅間)は子不知親

不知駅↗勝山間)と共に、北陸街道最大の交通の難所「天下の險」として知られました。飛騨山脈の北端が断崖絶壁となつて一気に日本海に落ち込むという特異な地形になっているからでした。明治16年に断崖山腹に道を開削される(「矢如、砥如」開通記念に絶壁に刻まれた文字)までは、日本海にそそり立つ断崖下のわずかな波打ち際を人々は行き来したのです。旅人は皆、岩壁直下のわずかな波打ち際を歩きました。特に初冬から春までの季節は、大波にさらわれる危険にさらされます。大波が来ると岩壁の窪みや割れ目に避難し、時には1週間以上も足止めされるということや、途中で波に命をさらわれるという悲しい出来事も多かったという記録も残っています。親不知・子不知の地名は、この命がけの通行に期するといわれています。古文書等の記録によれば、鎌倉時代の源義経や、戦国時代の土杉謙信、江戸時代には松尾芭蕉や伊能忠敬などが通ったといわれ、参勤交代の加賀の殿様が通る際は、近くの村から千人以上の百姓や漁師などが波よけ人足として集められ、長い行列が通り過ぎていったということです。

【山廻りの道・坂田峠】

こうした交通の難所には、先人の知恵で、当然のように海が荒れて通行不能の場合の避難路が開拓されていました。親不知の途中から市振方面へは一本杉峠から上路へ。または、二本松峠(松の幹下に古びた石地蔵が並ぶ)より上路へ(現在でも道跡

はある)山道がつながっていました。そしてもう一本の山道があり、少し奥につけられた道に坂田峠があります。峠は上路から橋立に通じる旧北陸第二街道の役割を果たしました。越中↗上路↗坂田峠↗橋立↗青海↗越後を結ぶ重要な山廻りの道でした。峠には今も、長い歴史と多くの旅人たちを見守ってきた古びた道祖神が静かに鎮座しています。

【賑わった坂田峠と橋立金山】

橋立金山は白鳥山の東面にあり、今でも無数の廃坑となつて残っています。開坑の歴史は古く、鎌倉時代に試掘され、土杉謙信時代に50貫(188kg)の金を産したと云われ、戦国時代の貴重な軍資金となつていた史実があります。その後、幾たびかの栄枯盛衰を繰り返しながら、明治の終わりには、採掘深部鉱床の出水水没もあって採掘不能となり廃坑になったのです。最盛期は1897年(明治30年)ころから10年間ほど続き、ゴールドラッシュの賑わいを見せました。金山には千人もの人たちが賑わい、神社や病院、そして学校まであったこと。さらに、糸魚川町の人たちがランブ生活で暮らしていたころ、金山では水力発電を備え、電灯の光が灯っていたといいます。多い年には1年間に200kgの金を生産し、金沢まで運んでいたことや、坂田峠を朝日町の芸姑を乗せた人力車が行き交ったという記録も残っています。金山が最盛期のころの山路を芸者街道と呼んでいたことも知られています。

今、坂田峠から橋立金山跡地までの間は、2000年に新たに林道が敷設されたため、旧道は閉ざされ深い藪のなかに埋もれています。(林道は崩落箇所もあり現在通行止め)

【坂田峠周辺の魅力】

今回紹介できなかった「上路」の山姥伝説や青海川上流(橋立ヒスイ峡)、坂田峠の化石発見の期待等)など、伝説・大地の魅力や白鳥山周辺の地質(中生代の地質・恐竜の化石発見等)など、伝説・大地の魅力にもこと欠かない地域です。山廻りの第二街道・坂田峠の地に立つて、道を往来した先人の故事来歴を偲んで欲しいものです。



坂田峠：往来の先人を見守ってきた道祖神

令和2年中における新潟県内の 山岳遭難発生状況について

新潟県警察山岳遭難救助隊長

玉木大二朗

日本山岳会越後支部の皆様には、日頃から安全登山の励行や登山届の提出の勧奨等を実践していただき、ここに御礼申し上げます。

さて、令和2年はコロナ禍のため山岳関係諸団体による登山の自粛呼びかけや、緊急事態宣言の発令による日常生活の変化などにより、各地域での登山者が減少したものと推察いたします。登山者の減少により県内での山岳遭難も例年に比べ少なくなりましたが、依然として中高年齢者の遭難や道迷いによる遭難が発生しています。

令和2年中の新潟県内で発生した山岳遭難の特徴について、次のとおり紹介いたします。

1 目的別の発生状況

山岳遭難の統計は目的別に分類され、昨年1年間の発生件数は76件で、遭難者は87人でした。登山目的の発生は44件。遭難者は53人でそのうち死者が5人、負傷者が26人、無事救助された人が22人でした。

山菜取りは23件で、遭難者は24人です。うち死者が4人、行方不明者が1人、負傷者が6人、無事が13人でした。

溪流釣り等その他の遭難は9件。遭難者は10人でそのうち死者が1人、負傷者が2

人、無事が7人でした。

2 態様別の発生状況

遭難が多かった態様について掲載すると、一番多かったのが道迷いの23件で、遭難者は26人、そのうち死者が1人、負傷者が2人、無事が23人でした。

次に多かったのが転倒で14件。遭難者は14人でありすべて負傷しています。

また、滑落と疲労による遭難がともに9件発生しており、滑落による遭難者は9人でそのうち死者が3人、負傷者が5人、無事が1人であり、疲労による遭難者は12人で、全て無事救助されています。

病気による遭難は7件。遭難者は7人でそのうち死者が3人、無事が4人でした。

3 季節別の発生状況

1月～2月の冬山シーズンは8件。遭難者は9人でそのうち死者が1人、負傷者が1人、無事が7人でした。

3月～5月の春山シーズンは25件。遭難者は26人でそのうち死者が7人、負傷者が9人無事が10人でした。

6月～8月の夏山シーズンは20件。遭難者は21人でそのうち死者が1人、行方不明者が1人、負傷者が7人、無事が12人でした。

9月～11月の秋山シーズンは23件。遭難者は31人でそのうち死者が1人、負傷者が17人無事が13人でした。

12月中の発生はありませんでした。

季節別の発生状況の特徴は、前年の令和元年と比較すると冬山・春山・夏山シーズ

ンは減少したものの、秋山シーズンは増加しました。昨年の秋山シーズンは、多くの登山者があったものとみられ、県内主要山岳の登山口駐車場は満車状態の日が続いていたようです。このため遭難者が増加したものと考えられます。

4 パーティ構成別の発生状況

単独による遭難が41件、2人パーティが14件、3人が11件、4人が3件、6人～9人のパーティが5件、10人以上のパーティが2件発生しています。

単独での登山はアクシデント発生時には、対応能力に限界があるため単独で登山を行う上でのリスクを考えなければなりません。

5 年代別の発生状況

年代別の発生状況は20歳未満が1人、20歳代が6人、30歳代が4人、40歳代が12人、50歳代が7人、60歳代が22人、70歳代が18人、80歳代が16人、90歳以上が1人となっています。

6 登山目的による山岳別の発生状況

登山目的を対象に、どんな山で遭難が発生しているのかを掲載します。

一番多かったのが弥彦山で8件、遭難者は8人、死者はありませんでした。

次に巻機山では4件、遭難者は5人で死者はありませんでした。角田山では3件、遭難者は3人でそのうち死者が1人となっています。

その他2件の遭難が発生した山岳は、袴腰山、守門岳、五頭山、大源太山、平標山、

万太郎山、苗場山です。このうち袴腰山と守門岳では死者が出ています。

また、白山、菱ヶ岳（五頭連峰）、大平山、松平山、越後駒ヶ岳、荒沢岳、小松原湿原、八海山、丹後山、神楽ヶ峰、米山、妙高山、火打山、鋸岳（頸城）、海谷駒ヶ岳でも1件ずつ発生し、白山と菱ヶ岳では死者が出ています。

7 登山計画書の提出及び山岳保険加入状況

登山目的で遭難した44件のうち、登山計画書を家族、所属山岳会、警察、登山届提出箱等のいずれかへの提出もしくはスマホやパソコンを利用した電子届けを行っていた個人・パーティは16件で、未提出は28件で全体の6割以上でした。

また、登山目的で遭難した53人のうち、山岳保険に加入していた人は11人で、加入していなかった人が42人で全体の約8割でした。

『自分は大丈夫、私に限って』とか、遭難に対する何の根拠もない自信を持っています。山岳保険と登山計画書の提出はもしもの時の命綱です。大切な家族のためにも加入と提出をお願いします。

8 山岳遭難のキーワード

昨年発生した山岳遭難を分析した結果、注意を要するキーワードを列挙すると、『道迷い、転倒、滑落、疲労、病气、春山、夏山、単独、40歳以上、登山計画書、山岳保険』です。そして山岳遭難は標高の高さに関係なく、どんな山でも発生しているとい



救助活動の様子

うことです。

9 自分の安全は自分で守る

本年もコロナ禍により日常生活や登山に対する環境が変わり、以前の様に無条件で登山を楽しめる保証はありません。コロナ対策と山岳遭難対策の共通するところは、自分の安全は自分で守ることです。皆さん一人一人が感染しないため、遭難しないため、自分で何をしなければならないかを考えて行動していただきたいと思います。

最後に、皆様のご健康と安全登山を心から祈念申し上げます。(令和3年1月9日)

「古道」調査にご協力を!!

日本山岳会が選ぶ「日本の山岳古道120選」

《日本山岳会120周年記念事業》

「ふるさと」を再発見しよう!!

日本山岳会は120周年記念事業として、全国の山岳古道を調査し2025年の発表を目指している。

古道を文化的、歴史的、地理的な観点から調査、記録、保全につなげ、活動を通して地域や日本のアイデンティティを再認識する事を目的としている。

かつて多くの人に利用された古道(官道、街道、生活道、参拝道など)は、いたるところで破壊され、崩れ、藪に埋もれて、存在さえ人々の記憶から消え去りつつある。古道を調査し、資料を作成して公開する事で、地域を見直し、再発見することができる。

古道を踏査し文献や地域からの聞き取り、報告として発信する。また山の新しい楽しみ方を提案し地域貢献に寄与するとともに、日本山岳会(支部)の活性化を図る。越後支部としては「越後・山岳古道調査プロジェクトチーム」が中心となり、可能な限りの支部会員、地元住民や研究者の協力を得てこの事業を実施する。

プロジェクトチームの設立と方針決定

越後支部では、12月12日の拡大役員会において「越後・山岳古道調査プロジェクト

後藤 正弘

チーム」を設立し、方針を決定した。山岳古道調査は今後5年程度の取り組みとなる。上越・中越・下越・佐渡・(会津)地域で古道調査を実施する。当面はプロジェクトチームを中心に活動を開始するが、支部の活性化や会員獲得を重視し、各地区の実情に応じて会員や協力者の拡大を図りたいと考えている。

《プロジェクトチームメンバー》

◎統括リーダー(後藤 正弘)

●統括サブリーダー(松井 潤次)

○上越地区

地区リーダー(後藤 正弘)

サブリーダー(七澤 恭四郎)

メンバー(松尾 知弘)(朝比奈 信男)

○中越地区

地区リーダー(吉田 理二)

サブリーダー(井口 光利)

○下越地区

地区リーダー(遠山 實)

サブリーダー(佐久間 雅義)

メンバー(渡邊 忠治)(小田 捷寿)

○佐渡地区

地区リーダー(藤井 与嗣明)

○会津地区

地区リーダー(佐竹 信幸)

サブリーダー(森沢 堅次)

当面(3月末)は、支部推薦古道の選定を急ぐ

日本山岳会は創立120周年となる2025年(令和7年)10月に、(日本山岳会が選ぶ「日本の山岳古道120選」(仮称))として、ホームページ及び書籍として発表を考えている。

越後支部としては、上越・中越・下越・佐渡・(会津)から、推薦古道の提出を受け【対象古道5条件】に照らし5本程度を選定して、今年の3月末までに本部へ提出し、その後に文献、現地、聞き取り調査を開始する。

【対象とする古道】

①山岳古道(旧道・廃道)もしくは山に関わる道

②経済(塩、食糧、肥料、燃料、鉱山など)、信仰、軍事、政治、交通路(街裏街道)などで利用されていた古道

③ストーリー性(文学、伝説、史実、詩歌など)がある古道

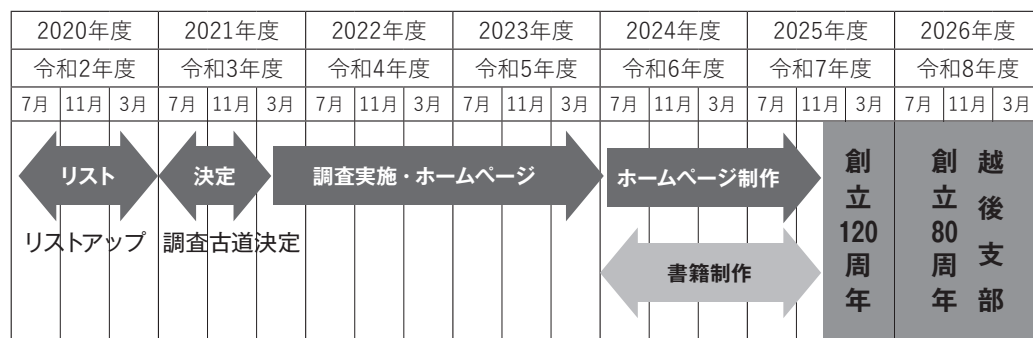
④遺跡や石碑などが残る古道

⑤できる限り、いま脚光を浴びることなく、整備されておらず、忘れ去られようとしている古道 (無名で未整備、記憶から忘れ去られようとしている古道)

支部は並行して、可能な限りの古道調査を今後のデータベース作りとして進める

越後支部は2026年(令和8年)に創立80周年を迎える。越後には数多くの古道があり、選定から漏れる貴重な古道を支部

としてまとめる必要がある。したがって、基礎調査を実施し集約として「越後山岳」(第14号)等で「越後の山岳古道〇〇選」(仮称)として発表したい。山岳古道調査は、ふるさと越後の再発見でもある。多くの会員の参加と協力をお願いします。



【山岳古道調査スケジュール】

冬の山を楽しみませんか!! 2021年 スノートレッキング

越後スノートレッキング同好会主催。会員・会友を原則としますが、会員が推薦する人も参加可能です。

①頸城「神奈山」藤巻尾根 標高1、500mラインまで(妙高市) 広大なブナの森が美しい、妙高本峰の景観は迫力満点です。

・2月20日(土) 午前8…00に妙高市関温泉スキー場駐車場集合

・往復所要時間…5…6時間

・申込締切…2月10日(水)

②頸城「前烏帽子岳」 標高1、450.5m アルプスのような「海谷」の雪景色は素晴らしい。

・3月27日(土) 午前8…00に糸魚川市上早川公民館駐車場へ集合

・往復所要時間…5…6時間

・申込締切…3月17日(水)

③魚沼「日向倉山」 標高1、430.6m 秘境銀山平の知られざる大展望が楽しめます。

・4月8日(木) 午前8…00に銀山平・白岩岩橋付近へ集合

・往復所要時間…5…6時間

・申込締切…3月30日(火)

●事前申込制で、集合場所へ集結し山行後に解散

●前記3件の申込先

①②後藤正弘

☎携帯090-13349-6332

③松井潤次

☎携帯090-14621-1825

スノートレッキング山行報告

『刈羽米山』

廣井博行

支部例会山行が令和2年12月27日(日)

に柏崎、刈羽の名峰米山で実施されました。

今年度の初旬から新型コロナウイルスの影響を受け計画していた行事が中止に追い込まれた中での山行でありました。特に年末

に来てコロナの第3波の猛威で参加メンバーの集まりが心配でしたが、結果的に14

名での活動となりました。山行当日、小生、6時30分に家(安田)を出しましたが小雨が

パラついており少し心配でした。登山口の

大平集落に到着すると、既に小千谷、新潟

方面の参加メンバーの方々が出発の準備を

していました。今回の山行の2日前の25日

に米山には結構雪が降ったらしく、此処大

平で30cmはあったと思います。メンバー構

成は男性10人女性4人の会員達です。挨拶

もそこそこの後藤副支部長を先頭に8時過

ぎ出発しました。先行者が何人か登ってい

るのでラッセルの必要がなく大変楽でした。

幸い雨も止んで来て風も感じない状況

ではありましたが空は暗く鉛色でした。出

発して25分、尾根に出ました。通常此処で



米山山頂にて 後藤正弘氏撮影

一休みするところですが、休憩なしで皆さん快調のようでした。この辺りは檜の木が中心で2日前の積雪で木々の枝には沢山の雪が残っていました。9時半、711m峰、積雪1m位。ようやく上空の雲も晴れて来て下界の柿崎・上越方面のロケーションの綺麗な所が目に入りました。米山の核心部はここからで、細い尾根とその先の急なブナ林を登らなくてはならないのです。しかし、今日は雪山の条件も良く、特に雪をまとったブナの木々の美しさには感動のほか何もありません。今回のテーマ「霧氷のブナ林と海を眺める」を共に果せました。急なブナ林を抜けるともうすぐ山頂です。空も青空が出てきて、お日様も当たる様になってきました。予定より早く11時山頂に到着。山頂小屋の前で記念写真を撮り、小屋の中で昼食としました。11時45分下山開

始。少し気温も上がり木々に積もった雪も落ち始めてきました。14時45分、事故・怪我もなく大平登山口に到着。この季節にもかかわらず楽しい山行が出来ました。ありがとうございました。

令和3年

公募登山について

事業委員会 小山 一夫

令和2年度は新型コロナウイルスで翻弄された年でした。「公募登山」「平日トレッキング」も支部行事の自粛で中止しました。各コース共多数の参加申込をいただきました皆様には、ご迷惑をおかけしたことをお詫びしたいと思います。

本年度の「公募登山・平日トレッキング」は令和2年度に計画したコースを同じ時期に開催したいと思っています。昨年末になり再度新型コロナウイルスが全国的に猛威を振るいだしています。これが春迄続く昨年同様に自粛する事になると思いますが、状況を注視したいと思っています。3密を出来るだけ避け、開催する方法で検討したいと思っています。

支部会員と交流する「上高地集会」は本部の山研委員会の令和3年度方針が決まってから検討したいと思っています。昨年度並みの「山研」の利用要項では開催は難しいと思います。

この状態がかなりの間続くと思われる。知恵を出し合い、開催の方向付けを検討していきたいと思っています。会員の皆様の

ご協力、ご支援でこの難局を乗り越え、支部の活性化を目指して活動していきたいと思っています。

令和3年度の「公募登山」「平日トレッキング」は左記の計画で実地します。

・公募登山

6月 神奈山

10月 信越古道

・平日トレッキング

4月 八石山

5月 大仏山・須刈岳

10月 蒲生岳・大力山

11月 番屋山



事務局からのお知らせ

●高頭仁兵衛翁寿碑修復募金の協力のお願

い

12月に「写真で見える高頭祭のあゆみ」を発送し、同封した寿像碑修復募金のご協力をお願いしました。12月26日までに一部の方々から振り込みがありました。募金期間は令和3年6月末までとなっております。よろしくお願い致します。

コロナ禍で厳しい経済情勢下で誠に心苦しいお願いであります。募金趣旨書の内容をご理解いただき、ご協力を賜りたくお願い申し上げます。

令和3年7月25日(日)の第64回高頭祭は、修復記念竣工式を兼ねて開催する予定です。

●越後支部会員の勧誘と加入に協力お願い

越後支部では新人会員の勧誘強化に取り組んでおります。昨年度は転入会員1名、新入会員3名と新しい仲間を得ることができました。更なる会員増加に支部会員の皆様のご協力をお願いします。支部事務局へ問い合わせいただければ「パンフレット」及び「入会申込書」を送付いたします。是非、お声がけください。なお、「入会申込書」は日本山岳会のホームページからもダウンロードできます。

(注意) 昨年10月から入会申込書が新しくなりました。以前の申込書は使用しないください。

●支部会員動向(2020年10月～12月)

・物故会員

荒木 吉栄(8247) 新潟市 11月

・退会者

小林 由夫(13622) 三条市 6月

(前回支部報記載漏れ)

・転入会員

山田 和人(9909) 妙高市 11月

●支部会員総数(2020年12月27日現在) 175名

編集後記

寒波到来と新型コロナウイルス拡大による新しい生活様式で新年を迎えました。

支部活動もままならない昨年でした。ここで今一度原点に立ち返り、支部会員であり新潟県警山岳遭難救助隊長の玉木様から『新潟県内の山岳遭難発生状況』について寄稿して頂きました。改めて安全登山を心掛けたいと思っております。

昨年の山行の折、久し振りに岳友のIさんと再会し、一緒に下山した時のことでした。彼は下山口で、今降りてきた山を振り返り、一礼したのでした。箱根駅伝で走り終わった選手達が、コースに振り向き一礼する姿と同じでした。

山に登らしてもらおうという感謝の気持ちでいつの間にかすっかり忘れていたのでした。それからは敬意を表す一礼を心掛けております。

(井口 光利)